

ふりがな 氏名	だるみ かたりん DALMI KATALIN <span style="float: right;">㊦</span>
論文題目	村上春樹文学と魔術的リアリズム
<p><b>【本論の目的】</b></p> <p>本研究の目的は、短編小説と長編小説を中心に、村上春樹文学における魔術的リアリズムの手法を探ることである。</p> <p>村上春樹（1949 年～）は現在世界で最も注目されている日本人作家の一人であり、村上春樹文学については、日本国内にとどまらず、海外でも多様な研究が行われてきた。論者の出身国であるハンガリーを含む欧米圏では、幻想的な要素に富んだ村上春樹文学は日本を代表する「魔術的リアリズム」として紹介されてきた一方で、日本では村上春樹文学を「魔術的リアリズム」と結びつけて論じる研究は極めて少なく、「魔術的リアリズム」という用語さえあまり知られていない。従って、本論文では、欧米圏と日本における村上春樹文学の受容に見られる相違を踏まえ、魔術的リアリズムについて紹介し、村上春樹文学における魔術的リアリズムの手法とその変化について考察を行った。</p> <p><b>【本論の構成】</b></p> <p>本論は序章と終章を除き 3 部 8 章によって構成されている。本論の第 I 部においては、本研究のキーワードである魔術的リアリズムについて概説した。</p> <p><b>第 1 章「魔術的リアリズムの歴史—ヨーロッパの絵画から世界文学へ—</b>」では、ヴァイマル共和国時代のドイツの美術評論まで遡り、魔術的リアリズムの歴史を辿った。まず、美術評論家フランツ・ローが提唱した「マギッシャーレアリスムス」について概説し、魔術的リアリズムの先駆者たちを紹介しながらラテンアメリカ文学から世界に広がった魔術的リアリズムの発展について概説し、名称の整理を行った。</p> <p>魔術的リアリズムの明快な定義は未だに存在していないため、<b>第 2 章「魔術的リアリズムをめぐる学説の整理とその特徴」</b>では、魔術的リアリズムに関する主な学説を整理した。具体的には、1950～60 年代における早期の魔術的リアリズム論まで遡り、幻想文学との比較を出発点とした 1970～80 年代の学説を経て、魔術的リアリズムをポストモダン文学の枠内で捉えた 1990 年代以降の学説に着目した。なお、村上春樹文学における魔術的リアリズムに関する先行研究を確認した上で、本論で用いる魔術的リアリズムの定義を試みた。本論では、魔術的リアリズムをラテンアメリカ文学に限定せず、現実的な要素と非現実的な要素を混合させ、合理主義を離れた視点から現実を捉え直す語り的手法として捉えた。</p>	

**第 3 章 「踊る小人」論—「踊る小人」に見る 1980 年代の日本—** においては、1983 年に発表された「踊る小人」に着目した。まず、語り手の異常とされている視点と現実の照射について考察を行った上で、テキストにおける「象工場」を敗戦後の日本における大量生産、「象の水増し」を消費社会における「個性」の大量生産のパロディーとして解釈した。よって、主に「ハイ・ファンタジー」として捉えられてきた「踊る小人」は、実は現実から完全に切り離された物語ではないことを確認し、テキストにおける魔術的リアリズムの手法は、1980 年代の高度資本主義社会の不条理な側面を描くためのツールとして機能していると結論付けた。

**第 4 章 「TVピープル」論—「マジック」の起源としてのメディア—** では、1989 年に書かれた「TVピープル」について考察を行った。まず、魔術的リアリズムの手法とテキストにおける二項対立の崩壊に着目し、現実と非現実の融合は、「僕」の語り及びテキストの形式によって更に強調されていることを指摘した。それから、テキストにおけるマスメディアの描写に焦点を当て、本作品は日本の消費社会の〈吸収力〉とそれを支えているマスメディアの力を描いていると述べ、本作品におけるマジックの起源は、メディアによって支配されている情報社会の狂気にあると論じた。

**第 5 章 「タイランド」論—魔術的リアリズムと〈<sup>イメージ</sup>像〉の世界をめぐる—** においては、1995 年以降に村上春樹文学における魔術的リアリズムの変化に着目した。1999 年に発表された短編小説「タイランド」は、1995 年の阪神淡路大震災と東京地下鉄サリン事件の延長線上に書かれた作品だが、震災は直接的には描かれておらず、主人公にとって過去のトラウマと直面し、自分の内界を観察する契機として位置付けられている。本章ではまず、本作品の舞台に着目し、〈タイランド〉は主人公の内界を具現化する魔術的な空間であると指摘した。その上で、主人公が過去のトラウマと如何に対面し、乗り越えていくのかについて考察を行った。そして、トラウマを克服する手法として主人公が自分の内界を旅し、そこで新しい物語を手に入れて現実世界に戻っていく過程を描いた本作品は、村上春樹が 1995 年以降に見出した作家としての使命、つまり麻原彰晃が作り上げた悪質な物語を放逐できる力を持つ物語を提供しなければならないという使命感を反映した作品だと論じた。なお、本作品における魔術的リアリズムは、災害によって人々の内界における変化を可視化させるための手法であると指摘した。

第Ⅲ部では、村上春樹の長編小説に見られる魔術的リアリズムの手法について論じた。

**第 6 章 「『ねじまき鳥クロニクル』論—魔術的リアリズムと歴史の描写—** では、魔術的リアリズムの手法と歴史の描写について論じた。まず、第 1 部「泥棒かささぎ編」と第 2 部「予言する鳥編」（1994 年）における歴史の描写に着目し、本作品における魔術的リアリズムは、歴史を他者との繋がりを可能とする神秘的な力の源泉として描く手法であると指摘した。それから、「鳥刺し男編」（1995 年）における「仮縫い」という神秘的な治療と歴史の虚構化に着目しながら、本作品と

魔術的リアリズム文学の関係について論じた。本作品においては、外部の支配者対内部の被支配者という、魔術的リアリズム文学によく見られる構図がシステム対個人という、内部をめぐる問題に置き換えられているが、公的歴史を批判する点においては、魔術的リアリズム文学と類似性を持っていると指摘した。

**第 7 章「『海辺のカフカ』論—魔術的リアリズムとネオ・シャーマニズム—**」においては、2002年に発表された『海辺のカフカ』を取り上げ、トラウマと魂の回復という主題に着目しながら、魔術的リアリズムの手法とネオ・シャーマニズムの関係について論じた。奇数章の主人公カフカが、前近代的な物語空間に形而上的な旅をして魂の回復を得て現実社会に戻っていく過程を描いた本作品は、シャーマニズムにおけるヒーリングを想起させている一方で、読者にとってはプレモダンな世界と交流する場を与えており、ネオ・シャーマニズムと同様な効果を果たしているとして指摘した。そして、偶数章の主人公ナカタさんと佐伯さんが経験した幽体離脱の歴史的コンテクストに着目し、戦争を人間の魂を決定的に傷つけるものとして描かれている本作品は、歴史に対する批判性を持っていると論じた。

**第 8 章「『騎士団長殺し』論—「マギッシャーレアリスムス」との関連性と「アンシュルス」のモチーフを中心に—**」では、2017年に発表された『騎士団長殺し』について考察を行った。まず、マギッシャーレアリスムスとテキストにおける魔術的リアリズムの関係について論じた上で、悪の描写に着目し、本作品のアクチュアリティについてハンガリー人読者の視点から考察を行った。具体的には、主人公が自分自身の中に潜んでいる悪と暴力性を発見していく過程を描いた本作品は、村上春樹が「ハンス・クリスチャン・アンデルセン文学賞」の授賞式において自らの影との対峙の必然性について行ったスピーチと呼応していることを指摘した。そして、第 1 部の末尾にはノンフィクション『トレ布林カの反乱』からの引用文が挿入されていることによって、『騎士団長殺し』における悪の背景には、ホロコーストなど、第二次世界大戦における巨大な暴力の影が偏在していると述べ、テキストはヨーロッパ人の読者にとって極めてアクチュアルな問題に焦点を当てていると指摘した。

### **【結論】**

本論で明らかになったのは、1980年代から1990年代前半の間に書かれた村上春樹文学における魔術的リアリズムの手法は、個人を圧倒する消費社会や高度資本主義社会に内包されている不条理を描き、読者にとって現実を見る新たな視点の提供するツールとして捉えられることである。それに対し、「コミットメント」が強調されている1995年以降の村上春樹文学においては、歴史に関する描写が増えてきたにも関わらず、重点は個人的トラウマの克服と魂を癒す物語の発見に置かれ、魔術的リアリズムの手法は人間の無意識をプロットする手法として機能を果たすようになった。従って、魔術的リアリズムの本質が、読者に現実を見る新たな視点を与えることを目指している作者の社会貢献であるとするれば、村上春樹を純粋な「魔術的リアリズム作家」として捉えることには留意が必要であ

ろう。

消費社会と高度資本主義社会の不条理や非人間性に焦点を当てた初期の作品群における魔術的リアリズムの手法は、作者の社会貢献のツールとして捉えられる。一方で、ある程度の歴史批判が見られても重点が登場人物達の内界と無意識をめぐる描写の方に移ってきた 1995 年以降の作品群は、ポリティカルなメッセージが重視されている魔術的リアリズム文学とは異なった性質を持っていると言わざるを得ない。そして、これらの作品を魔術的リアリズム文学として捉えられるかどうかは、作者の内面的な「コミットメント」をどう評価するのかという問題に繋がる。要するに、テキストにおける幻想的な要素の使用が、読者に現実を見る新たな視点を与える機能を果たすのであれば、ラテンアメリカで発展してきた魔術的リアリズムとは異なっても、テキストを魔術的リアリズム文学として見做すことは可能であろう。

備考 要旨は、日本語 4,000 字以内又は英語 1,500 ワード以内とする。